

白族董氏の系譜と祖先伝承

Genealogy of the Dong clan of Bai and Traditions of their Ancestors

流通経済大学法学部准教授

富田美智江 TOMITA, Michie

はじめに

中国雲南省大理白族自治州大理市鳳儀鎮北湯天村の法蔵寺のとなりに、董氏宗祠がある。祠は乾隆二十五年（1760年）に建てられたとされ、中には董氏の族譜を刻した石碑が安置されている。

『通典』に「(西洱河に)数十姓有り、楊・李・趙・董を名家と為す」とあるように¹⁾、董氏は古くから洱海を中心とする大理地域の大家の一つで、族譜の類も複数残されている。

白族は漢族と同じように家譜や族譜の編纂が盛んな民族である。張錫禄によると、その伝承形態は口承式、墨書式、石碑式の大きく三つに分けられる。口承式の主な流行地域は怒江傈僳族自治州に住む勐臘系の白族で、かつては先祖の名を二十世代以上も暗誦したという。墨書式は紙などに墨で書き記すもので、大理白族で一般的に使われる形式である²⁾。そしてより確実な形で後世に残したいという考えから現れたのが石碑式で、董氏宗祠の族譜碑がまさにこれに当たる。

鳳儀の董氏族譜碑の存在は早くから知られていた。1987年には、董氏宗祠が雲南省文物保護単位に指定され、1991年に出版された『白族社会歴史調査』第4輯にも、その碑文が収録されている。董氏宗祠には、南詔時代から続く董氏一族の

名を刻んだ世系碑の他に、董氏の略歴を記した「董氏本音図略叙」、そして洪武二十七年（1394年）の紀年銘を持つ聖旨碑がある。「董氏本音図略叙」と聖旨碑には、天から草中に落ちた卵から生まれ、仙鸞に育てられた童子が董氏の始祖となったという、卵生型の始祖伝承が語られている点が興味深い。「大理に二董なし」の言説が正しければ、大理董氏の始祖は一人となるはずだが³⁾、喜洲董氏の「大理史城董氏族譜」では、南詔時代の清平官で、『新唐書』や『資治通鑑』などにもその名が見える董成を始祖とするなど、董氏の祖先伝承は一致していない。董氏族譜碑については、父子連名制や白族密教（阿吒力教）と関連させて論じられることが多い反面、伝承内容そのものへの検討はやや不十分であると思われる⁴⁾。そこで本稿では、異常出生型始祖伝承をはじめとする董氏の祖先伝承について、鳳儀の董氏族譜碑や、同内容の伝承を多く含む鶴慶の董氏宗譜記碑、そして史書などの記述と比較しつつ、その内容を見ていきたい。

1. 董氏の始祖伝承

現在、董氏宗祠内の聖旨碑及び族譜碑は、写真1のように置かれている。上段右から二つ目の石碑が聖旨碑、上段中央が「董氏本音図略叙」、そして上段左と下段三つが世系碑である。「董氏本

写真1 鳳儀董氏宗祠・中央



写真2 鳳儀董氏宗祠・左



音図略叙」と四つの世系碑，合わせて五つの石碑が，「董氏族譜碑」として各本に収録されている⁵⁾。なお，写真1のさらに左側には，三十九世から四十三世までの新たな世系碑が二つ立てられている（写真2）。この石には，生者は赤字で，亡くなると黒字で名が刻まれる。2018年8月に董氏宗祠を調査したとき，筆者を案内してくれた董国勝氏の名は，左側の石の最上段，四十二世の一番初めに，「大理州地震局局长」の肩書とともに赤字で刻まれている。董国勝氏以外にも，肩書付きが散見する。「鳳儀県県長」や「豊楽郷郷長」，「小学教師」というのも数名いる。

まず，聖旨碑から見ていきたい。聖旨碑は高さ76cm，幅38cm。碑には，明の洪武二十七年（1394年）仲冬に国師董賢へ与えられた聖旨が刻まれている。碑文は漢文11行，縦書の楷書で書かれている（図1）。

「皇帝詔曰」に続く聖旨の内容は，次の通りである。

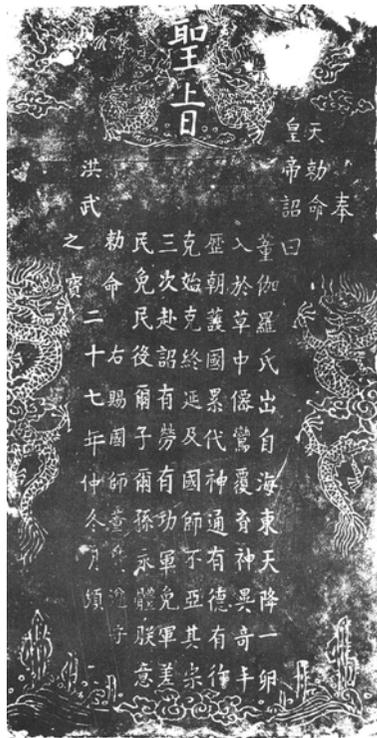
董伽羅氏は，海東より出ず。天，一卵を降し，草中に入る。仙鸞覆い育て，神異奇丰なり。累代神通あり。徳有り行有り，克く始め克く終わる。延じて国師に及び，其の宗に並らず。三次詔に赴き，勞有り功有り。軍は軍差を免じ，民は民役を免ず。爾の子，爾の孫は，永く朕の意を体え。

（董伽羅氏，出自海東。天降一卵，入於草中。僊鸞覆育，神異奇丰。歷朝護國，累代神通。

有徳有行，克始克終。延及國師，不亞其宗。三次赴詔，有勞有功。軍免軍差，民免民役。爾子爾孫，永體朕意。）

国師董賢の功績により，その子孫の軍役民役を免ずる，というのが聖旨の趣旨である。おそらく董氏はこの聖旨を石碑とすることで，子孫の護身

図1 明賜国師董賢聖旨碑



出典：『大理叢書・金石篇』（雲南民族出版社，2010年）（以下図4まで，出典同じ。）

としたのだろう。注目したいのは、冒頭に書かれた董氏の出自である。「海東」とは洱海の東側のことで、これによると董氏は、天から降りてきた卵から始祖が生まれたという卵生型と、仙鸞に覆われ育ったという動物養育型の二つの要素を備えた始祖伝承を、少なくとも明初には持っていたことになる。聖旨碑の記述は「天降一卵，入於草中，僂鸞覆育」と簡潔だが、族譜碑の「董氏本音図略叙」にはより詳細な内容が書かれている。

鳳儀の董氏族譜碑の大きさは、いずれも高さ、幅ともに91cm。一つ目の碑は、中央に「董氏本音図略叙」と大書されている。碑文は45行で1行約50字、始祖董伽羅尤から二十七世董焯智慧までの事績が漢文で書かれている（図2）。碑文中の最後の紀年は天順五年（1460年）だが、いつ書かれたものかは明らかではない。文中に「年は九百有余を歴，代は四十余世を経る」とあり、年数に合わせれば18世紀，世代数に合わせれば19世紀後半のころとなるだろうか。世系碑も、四つあるうち紀年があるのは三つ目のみで、そこには光緒十八年（1892年）とある。「董氏本音図略叙」も含めた族譜碑すべてが1892年立碑の可能性もあるが、後述する鶴慶の董氏宗譜記碑に、戊寅の年（1878年）に董氏宗祠の石碑を見て世系を確認したという記述があり、1892年以前からなんらかの石碑があったのは確かだろう。なお、

世系碑の一つ目には、明初の人で二十四世祖である董賢が立碑したと書かれているが、不審な点があり疑わしい⁶⁾。

末尾に資料として「董氏本音図略叙」の要約（始祖董伽羅尤から二十四世董賢まで）を載せたが、そこで述べられている始祖董伽羅尤の出生譚は、おおよそ次のようなものである⁷⁾。

- ・洱海東岩の草中に生まれる
- ・仙鸞が彼を覆い育てる
- ・漁師が彼を拾い養う
- ・生まれた場所で経書を入手し、神術を身につける
- ・（南詔王の）蒙氏が彼の評判を聞き、国師とする
- ・「董」字に草かんむりを加えた「董」字を姓とする

草中に生まれ、仙鸞に育てられたというところは聖旨碑と同じだが、聖旨碑の「天降一卵」に相当する話はない。ただし、彼を「天童」と称しており、天から生まれた子であることを匂わせてはいる。

董伽羅尤を始祖とする祖先伝承は、鳳儀董氏のほかに、鶴慶董氏の董氏宗譜記碑にも見える。董氏宗譜記碑は、雲南省大理白族自治州の北端に位置する鶴慶県太平村の董氏宗祠に、光緒二十一年（1895年）に立てられたものである（現在は雲南省鶴慶県文化館に保存されている）。董氏四十世の董維成が講述し、その孫の董興源が筆写した。文章

図2 董氏族譜碑1（董氏本音図略叙）

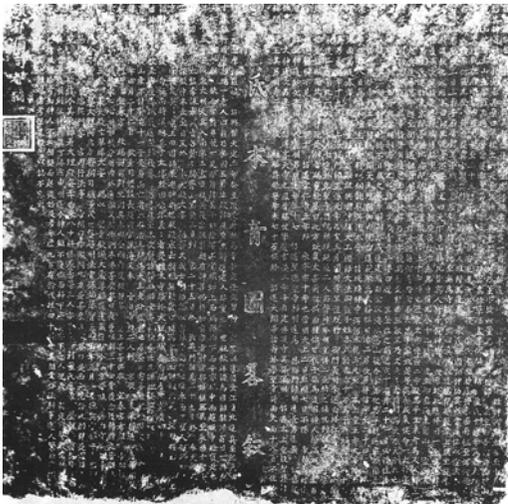


図3 董氏族譜碑2（世系碑1）

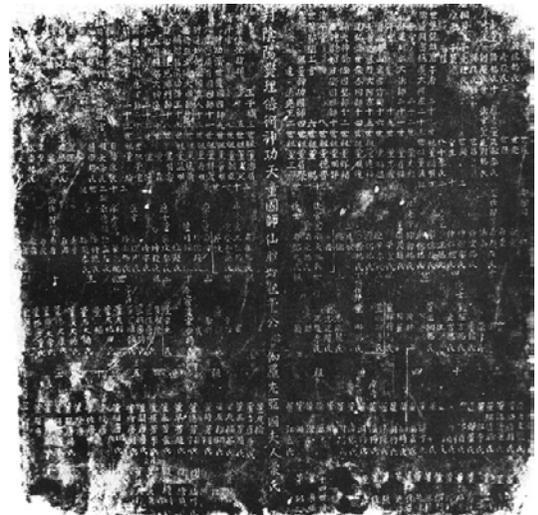
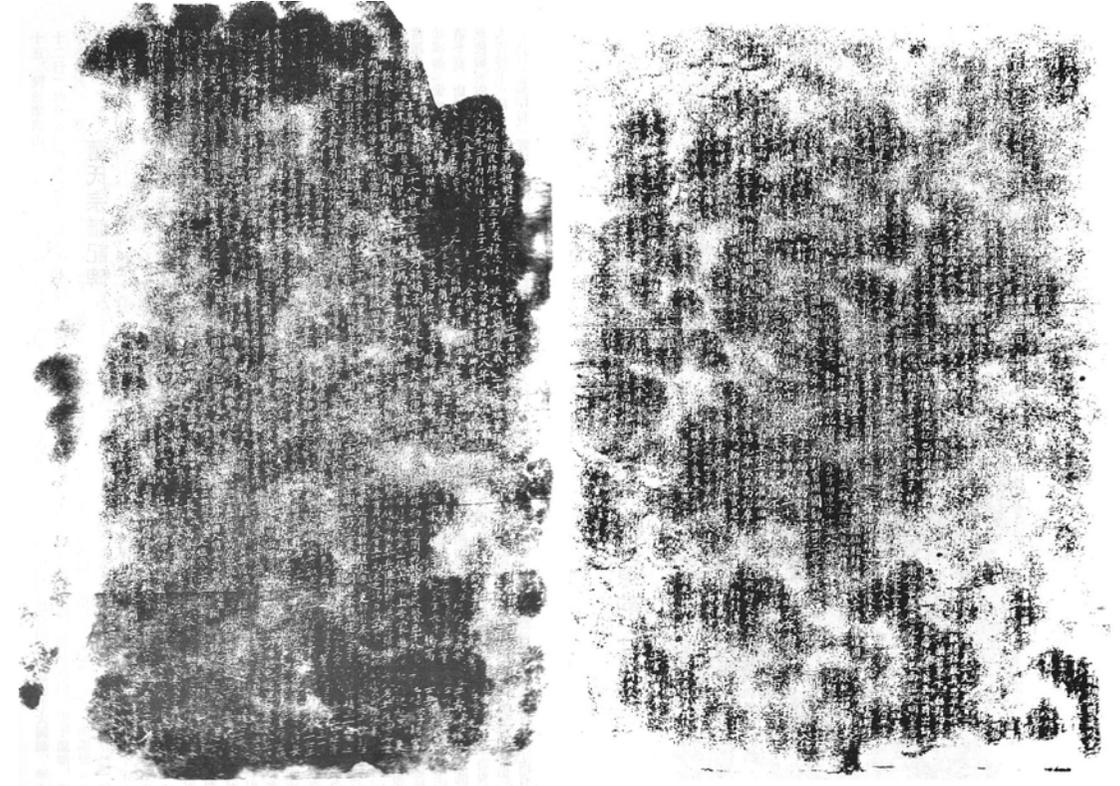


図4 鶴慶董氏宗譜記碑



は二つの碑に分けて刻まれており、碑の大きさはどちらも高さ85cm、幅65cm、行数は二碑合わせて71行、1行約80字、始祖董伽羅尤から述者の董維成を含む四十世までの子孫の事績が漢文で書かれている(図4)。一行目に、「董氏宗譜記」の題がある。

「董氏宗譜記」は、董伽羅尤の出生についておおよそ次のように述べている⁸⁾。

- ・ 洱海東岩の草中にうまれる
- ・ 仙鸞が彼を覆い育てる
- ・ 雲南王の蒙氏が彼を拾い養う
- ・ 出生にちなみ、「董」を姓とする
- ・ 生まれた場所で経書を入手し、神術を身につける
- ・ 蒙王は彼を国師とし、娘を与える

彼を拾い養ったのが漁師ではなく蒙氏である点以外は、「董氏本音図略叙」とほぼ同じである。王の娘を妻としたという記述は「董氏本音図略叙」には見られないが、世系碑の一つ目の中央には、「勅封陰陽變理僊術神功天童國師仙胎始祖董公諱

伽羅尤 亞國夫人蒙氏位」と大書されており、鳳儀董氏に伽羅尤が王の娘を妻としたという伝承がなかったわけではないことがわかる。ではなぜ「董氏本音図略叙」はそのことに触れなかったのであろうか。意図的に書かなかったのかどうかは現時点では判断できないが、南詔王の姻族であるということは鳳儀董氏ではさほど重視されていなかったのは確かだろう。これは、例えば香港新界の厦村鄧氏が、ある先祖が皇帝の娘を妻にしたという伝承を大変誇りに思い、機会あるごとにその繋がりを強調する⁹⁾、といった事例とは大きく異なる。

2. 神話的始祖を語る系譜

董伽羅尤の名は史書には見えない。「董氏本音図略叙」や「董氏宗譜記」は、南詔に攻めてきた唐の李宓の軍を、伽羅尤が神術で水死させたとするが、その話も他にはない¹⁰⁾。もちろん、754年に李宓軍が南詔に敗北したことは各書にその記述

を見ることができる。しかし、その勝利に貢献したのは、例えば南詔徳化碑では軍将王楽寛や大軍将段附克らであり、『南詔野史』では閻羅鳳の妻白妃の妖術である。

だが、董伽羅尤が実在の人物なのか、彼の事績ははたして史実なのか、といったことは、本稿ではあまり問題ではない。重要なのは、伝承の取捨選択である。子孫たちが祖先の伝承のどれを残し、どれを残さなかったのか、その選択に彼らの意図が隠されていることもあれば、彼らの意識や社会環境が影響を及ぼすこともあるだろう。そういう意味では、聖旨碑では語られた卵生型異常出生譚が、「董氏本音図略叙」や「董氏宗譜記」では言及されていないというのは、彼らの意識の変化の表れとして注視してよいかもしれない。

そもそも大理地域の董氏が、みな董伽羅尤を始祖と見なしているわけではない。例えば、「董氏宗譜記」に「董氏本音図略叙」とともに参照したと書かれている喜洲董氏の「大理史城董氏族譜」は、その始祖を南詔の清平官董成としている。史城とは現在の大理市喜洲鎮のことで、明の嘉靖六年（1527年）に第一回目の編纂が行われ、第二回は董正官によって清の道光壬寅年（1842年）に、第三回は清の同治丁卯年（1867年）に、第四回は1922年に行われた。全11冊13巻、字数は二十万字前後にのぼる¹¹⁾。

董成は南詔の世隆のときの清平官で、『新唐書』南蛮伝や『資治通鑑』に、唐懿宗の咸通七年（866年）に、董成が唐への使者となったことが載っている¹²⁾。こちらは、伽羅尤とは違って、史書にその名がある人物を始祖と見なしているということになる。また明代の墓誌にも、始祖を董成とするものが散見する一方、伽羅尤を始祖とするものは管見の限りでは見当たらない¹³⁾。

大理白族全体で見ても、董伽羅尤の異常出生譚のような神話的伝承を強調する族譜や家譜を持つ一族は実は少ない。白族の碑文や族譜の整理を数多く手がける張錫祿氏も、董氏以外には思い当たらないと言う。納西族の「木氏歴代宗譜」のように、雲南の少数民族の中には神話的始祖から系譜を説き起こす例が見受けられるが¹⁴⁾、神話的始祖

を語る系譜と語らない系譜には、その背景にどのような違いがあるのだろうか。

董伽羅尤は唐代の人とされており、神話的始祖とするには異論があるかもしれない。しかし、彼の卵生型出生譚は新羅の始祖赫居世の話を想起させるし、動物養育型は周の始祖后稷がその代表例に挙げられる。さらに高句麗の始祖朱蒙は卵生型と動物養育型の出生譚を併せ持っている。こうした神話的始祖と類似する出生譚を持つ董伽羅尤もまた、神話的始祖の資格を有していると考えてよいだろう。もちろん、伽羅尤の出生譚が漢籍から影響を受けた可能性は否定できない。だが、そうであればなおのこと、始祖に神話的要素を付与することを、子孫たちが自発的に選択したことになり、董伽羅尤を神話的始祖と位置付けることの問題はますますなくなる。

さて、白族が神話的始祖を語らない理由について、漢族の影響というのが一つ考えられる。漢族は、上古には上述の周の始祖后稷や、玄鳥の卵を呑んで生まれた殷の始祖契のように、神話的始祖の話は多いが、漢代以降になると、感生説話が帝王の条件のように扱われる反面、帝王以外の系譜では語られなくなっていく¹⁵⁾。大理地域では、南詔の人々は龍が化した沈木に感生して生まれた九隆を始祖とする哀牢の末裔であると自称し¹⁶⁾、また大理国の建国者段思平も九隆説話と同様の感生説話を持つ¹⁷⁾。特定の氏族の始祖ではなく、白族全体の祖のような扱いを受けている九隆や、王朝の始祖である段思平には、感生説話などの異常出生譚が語られるが、それ以外の多くの氏族では、神話的始祖よりも歴史的人物との繋がりが重視されるという点は、漢族の傾向と似ている。

では、そうした中で、なぜ鳳儀董氏は明代以降も神話的要素を持つ始祖伝承を保持し続けたのだろうか。それは鳳儀董氏が、「国師」という超常的な力を持つ宗教的職能者を代々輩出したという祖先伝承に、氏族のアイデンティティを求めたことと関係するのではないだろうか。

実は董伽羅尤の他にもう一人、卵生型出生譚を持つ人物がいる。高真寺の僧崇模である。『南詔野史』によると、南詔の景莊皇帝世隆に仕え、遠

征中兵糧が乏しくなると、神術で水を酒に変え、石を米に変えたという。崇模について、明・謝肇淛『滇略』は次のように言う。

唐のとき、漁師が洱海で大鳥の卵を拾い、持ち帰ると、卵が割れて中から嬰兒が現れた。漁師は不思議に思い、危害を加えなかった。嬰兒はよく食べ、また様々な技を習得した。成長すると僧になり、崇模荘に住んだので、人々は崇模師と呼んだ。思いのままに風雨を呼び、鬼神を使役し、また符咒を使って水や石を酒や食料に変え、千人もの人々を満足させた。南詔が彼を憚ったので、鵬に化して高真寺に飛び去り、その後の行方はわからない¹⁸⁾。

漁師が拾った卵から生まれたこと、神術を駆使し、戦に貢献したことなど、崇模の話は董伽羅尤と類似する部分が多い。崇模の話が見えるのは、現時点では明代以降の書物に限られているため、明初の洪武二十七年の紀年銘を持つ董氏の聖旨碑と、どちらの話が早くにできたのか、判断は難しい。だがどちらが元にせよ、この卵生型出生譚は、優れた神術を持つ白族密教（阿吒力教）の僧の神秘性を増すために有用な伝承であるとの認識が、明代の大理地域にあったことは確かだろう。

3. 鳳儀董氏と鶴慶董氏の祖先伝承

「董氏本音図略叙」で語られている董氏の祖先たちの事績を見ていくと、雨や雷など天候を操る話が多いことに気づく。これは、前節に出てきた高真寺の僧崇模の説話の中に、風雨を自在に操るという話があったのと同じで、密教の秘術を習得した僧たちにはそうした力があると一般に考えられていたためだろう。また、龍を追い払う話も複数出てくる。白族は龍にまつわる神話伝説が多いが、趙檣は、密教僧が龍を降す、あるいは馴らす話は、外来の密教と龍信仰をはじめとする白族土着の巫教との対立を象徴しているとする¹⁹⁾。

「董氏本音図略叙」は、世系碑に刻まれたすべての祖先の事績に言及しているわけではない。ところどころ数代飛ばす。表は、始祖から二十四世までの董氏祖先とその事績をまとめたものである。

封号・官職、名、世代数は世系碑によった。二十四世董賢以外は、みな世系碑第1碑にその名がある。兄弟など同世代が複数人いるときは、同一世代が続く。「董氏本音図略叙」での言及がある者については、「略叙」の欄に○印をつけた。

表の右側には、鶴慶の「董氏宗譜記」に記述された二十四世までの祖先とその事績を並べた。鶴慶董氏は、「董氏宗譜記」によると鶴慶に移住してきたのは二十四世の董信のときであり、そのため董信が鶴慶董氏の始祖とされることもある。つまり二十四世以下は鳳儀董氏と鶴慶董氏は完全に別系統となる。本稿で扱うのが二十四世までなのは、そのためである。鶴慶董氏は「董氏宗譜記」のみで、鳳儀董氏の世系碑にあたるものはないため、鶴慶の封号・官職は「董氏宗譜記」内の記述から取っている。

「董氏本音図略叙」と「董氏宗譜記」は、ともに董伽羅尤を始祖とし、その後も二十四世までは共通項が多く、おおよそ同じ祖先伝承を持っていると考えてよい。だが、こうして並べて比べると、世代のずれや片方にしかない人物がいるなど、それなりに違いがあることがわかる。二十四世はだいたい洪武から永楽の時代に当たるので、そこから四百年余りの間にそれぞれに生じた伝承の変化が、両者の違いとなって表れたのだろうか。ただ、それだけの違いとは言いきれない部分もある。

「董氏本音図略叙」と「董氏宗譜記」の最大の違いは、南詔の清平官董成の有無である。鳳儀董氏の系譜に董成はいないが、鶴慶董氏の系譜は鳳儀董氏のものに似ながらも、合間に董成が組み込まれている。言わば、鳳儀董氏の系譜と、「大理史城董氏族譜」の喜洲董氏の系譜を合わせたようなものである。「董氏宗譜記」が鳳儀董氏と喜洲董氏を意識して作られていることは、述者の董維成がわざわざ確認しに行っていたと言っていることから明らかである。しかし、「参考無訛」「無差謬」と言うには、違いは大きい。

「大理史城董氏族譜」は、始祖董成の下7代を失伝しているため、ひとまず置いておき、「董氏本音図略叙」と「董氏宗譜記」を比べてみると、世代や仕えた王のずれ、逸話の交錯などの違いに

比べ、封号は一致しているものが多い。このことから考えると、董維成が鳳儀で確認したときには、世系碑だけが合ったのかもしれない。

さらに、「董氏本音図略叙」の記述には、史実と照らし合わせると年代や王の名にしばしば不自然な点があり、はなはだしくは世系碑とも食い違いがあるのに比べると、「董氏宗譜記」の方ははるかに矛盾や誤りが少ない。では誤りが少なれば信頼できるかという、こうした民間伝承の場合はそうとも言えない。他の史書などの記述と矛盾が少ないということは、伝承編纂の際にそれらを参照し、修正した可能性が高いからだ。

鶴慶董氏の実際の始祖は、先に述べた通り、二十四世の董信であり、董信を一世祖と称する碑誌もあると「董氏宗譜記」内で行われている。その董信の前と後では、伝承の性質にも違いがある。董信以前は、鳳儀董氏と同じく超常的な力を持つ国師の逸話が多いが、董信以降は国師のような存在は出てこない。董信の直前の二十二世・二十三世分を失伝しているというのも、疑惑に拍車をかける。本当は董信が始祖なのに、歴史の長さを演出するために、他村の董氏の系譜や祖先伝承を拝借して、ほぼ丸ごと上に付け加えた可能性もあるのではなからうか。

4. 伝承は加上されるか

鶴慶董氏の実際の始祖は二十四世の董信であるのと同様に、鳳儀董氏の実質的な始祖は、二十四世の董賢であることは、「董氏本音図略叙」に、董賢の五人の子が湯天村の董氏五支族の祖となったとあることから確かである。だからこそ、世系碑の第1碑の末尾に、(後人の偽刻の可能性もあるにせよ)「系自唐宋元明裔孫董賢立」と刻まれており、また世系碑第2碑は、中央に大書された「勅封伏魔術正神通五密大我國師二十四世祖董公諱賢 命婦淑人楊氏之位」から始まっている。卵生型始祖伝承の記述を含んだ聖旨碑も、董賢に与えられたものであり、董氏宗祠のとなり立つ法蔵寺も洪武二十五年(1392年)に董賢が建立したものである。この法蔵寺は、1956年に南詔大理国時代の写本を

含む3000巻以上の仏典が発見されたことでも知られているように、白族密教(阿吒力教)の一大地であり、董賢は白族密教の一大有力者であった。

始祖董伽羅尤から二十四世董賢までは、南詔・大理国・元・明の大きく分けて四つの時代が含まれている。そして「董氏本音図略叙」の董伽羅尤以降の話を見ていくと、大理国建国時には九世董普明が、元のフビライの雲南侵攻時には二十三世無量が、そして明では二十四世董賢が、それぞれ王権と強い関わりを持ったことが主張されている。この三名の活躍は、それぞれ始祖に匹敵すると言っている。それどころか、彼らはもともと「始祖」だったのではないかとさえ思わせる。二十四世董賢が始祖に匹敵する神通力を持っていた(「神通與始祖無異」というのは、そもそも董賢自身が「始祖」だからなのではないだろうか。特にその疑いが強いのが、九世祖の董普明である。

史書にほとんど記述のない鳳儀董氏の祖先伝承の中で、九世董普明の事績だけが『南詔野史』や『滇載記』に見える。ただし、その名は「董普明」ではなく「董伽羅」、つまり始祖董伽羅尤とほぼ同じ名で登場しているのである。となると、聖旨碑の「董伽羅氏」というのも、南詔時代の董伽羅尤のことではなく、大理国建国期の「董伽羅」、すなわち董普明のことをもともと指していた可能性が出てくる。もしそうなのであれば、鳳儀董氏の始祖は聖旨碑の段階では南詔までさかのぼらず、「天降一卵」から生まれたという「董伽羅氏」の異常出生譚も、本来「始祖」であった董普明のものだった、ということになる。

もちろん、『南詔野史』や『滇載記』の記述が正しいという保証はなく、始祖董伽羅尤の伝承の成立が『南詔野史』よりも遅いかどうかは、あくまで可能性の話にすぎない。ただ、董賢以前の祖たちの中に、「始祖」足り得る性格を持つ者が複数いるということは言えよう。そして鳳儀董氏は最終的に、時代を南詔にまでさかのぼらせ、始祖を董伽羅尤とすることを選択した。もし董伽羅尤が、加上後よろしく後から新たに加えられた始祖であるならば、その伝承の中には、本来他の祖の事績として語られていたものも含まれていることだろう。

表

世 代	鳳 儀		鶴 慶		
	封号・官職／名	略叙	事蹟・備考	封号・官職／名	事蹟・備考
一世	勅封陰陽變理僊術神功天童国師董伽羅尤	○	洱海東岩の草中に生まれ、仙鸞に育てられる 漁師に拾われ、養われる 蒙氏に仕え、唐の李宓を撃退する(754年) 〔孝桓(異牟尋)〕のときとするが、実際は異牟尋の祖父閻羅鳳の時代の話 晩年、無為寺に住むようになると、もともとその地にいた龍が彼を避けて遷る	勅封陰陽變理仙術神功天童国師董伽羅尤	洱海東岩の草中に生まれ、仙鸞に育てられる 雲南王蒙氏に拾われ、養われる 国師となり、蒙王の娘亜国夫人を妻とする 神武王(閻羅鳳)のとき、唐の李宓を撃退する(754年) 晩年、無為寺に住むようになると、もともとその地にいた龍が彼を避けて遷る
二世	勅賜追冊慧光王董三廓	○	背に星があり、父の伽羅尤に「王になる」と予言される 蒙氏に王位を譲られる	勅封開慧光王董三廓	背に星があり、父の伽羅尤に「王になる」と予言される 孝桓王(異牟尋)に王位を三日間譲られる
三世	勅封王子職董廓眉	○		勅封王子職董廓眉	
四世	勅封無量神功国師董眉聚			勅封無量神功国師董眉聚	
五世	勅封世襲滇池指揮董丈足			勅封世襲滇池指揮董丈足	眉聚の長男
六世	勅封世襲都蘭土官董賜			清平官董成	景狂皇帝(世隆)に仕える 唐に遣わされる(866年) (碑文は「咸通元年(860年)」とするが、実際は咸通七年(866年)の出来事)
七世	清平官董朝臣			勅封国師董随求保	秘術を習う
八世	清平官董德普			勅封功德高岳济世護国国師董普明	段思平(大理国初代)に仕え、建国(938年)を助ける 明政皇帝段素順(第五代)のときに亡くなる
九世	勅封神功济世護国国師董普明	○	段思平(大理国初代)に仕え、建国(938年)を助ける	勅封梵業崇広大国師董明祥	昭明皇帝段素英(第六代)に仕える
十世	勅封神驗如日衛国国師董明詳	○	「略叙」での名は祥明 明啓帝(第七代段素廉)に仕える	勅封道济無方崇広国師董祥義	天明皇帝段素興(第十代)、聖徳表正皇帝高昇泰(位1095年)に仕える 雨乞いに成功する
十一世	勅封梵業広育国国師董詳義			神通妙化衛国真人董義明	高昇泰、宣仁皇帝段和誉(第十六代)に仕える 宮中に現れた黒龍を追い払う(1095年) 天に二つの太陽が照り、これを誂い収める(1116年)
十二世	勅封補天神術佐国聖師董詳福	○	祥明の次男 (十世祖祥明の子だが、十一世ではなく十二世となっている) 天佑帝に仕える (「天祐」の元号を持つ第十四代段正明のことか) 保安元年に麻和壇主となる (「保安」は第十一代段思廉の元号。段正明に「保立」「建安」の元号があり、もし「保立元年」ならば1082年) 雨乞いに成功する	勅封育国国師董明連	正康皇帝段正興(第十七代)に仕える

十三世	勅封神通妙化衛国真人董義明	○	正治元年(1095年)に宮中に現れた黒龍を追ひ払う(大中国高昇泰の元号「上治」ならば、1095年)宣仁帝(第十六代段正厳)に仕える天に二つの太陽が照り、これを祓い収める(1113年)	国師董連義	明連の長男 極功皇帝段智興(第十八代)に仕える
十三世				国師董連福	明連の次男
十四世	勅封道弘濟世保合国師董明連	○	聖徳皇帝(高昇泰)に仕え、恩聯門師となる	勅封東宮侍御董福温	連福の子
十五世	勅封道濟無方通天国師董連義	○	明連の長男「功極帝祚大神通」の号を賜る(功極帝とは第十八代段智興のこと)	大國師董温明	享天皇帝段智廉(第十九代)に仕える
十五世	勅封享天帝之鳳曆大阿左董連福	○	明連の次男 享天帝(第十九代段智廉)に仕える		
十六世	勅封爵鳳席山東宮侍御董福温			勅封灌頂国師董明寿	神宗皇帝段智祥(第二十代) 雪や雨を止ませる
十七世	勅封鎖関抛漠功浩王董温明	○	太上皇段智祥(第二十代、段智廉の弟)に、河尾鎖関抛漠王に封ぜられる	董寿智	明寿の長男
十七世				董寿正	明寿の次男
十八世	勅封凝心妙理恩聯門師董明寿	○	天開帝(第二十代段智祥)に仕える雨乞いに成功する	勅封相国国師董正福	寿正の子
十九世	清平官董忠義			董忠義	雨乞いに成功する(1253年)
十九世				勅封清平官董孝義	
二十世	勅封五密棟梁大神通董森			勅封清平官董連長	忠義の子
二十一世	勅封鉢蓮列水大法師董有福			法舟	連長の長男 出家し、無為寺を修理する元軍が攻めてきたとき、五光を發し、元世祖に謁見する(1279年)
二十二世	清平官董通				
二十二世	清平官董大光				
二十三世	勅命開国元勳順応国師董量	○	無為寺で修行する元世祖(フビライ)に、国師に封ぜられる		
二十三世	勅封法通頭密鎮魔大阿左董護				
二十三世	勅封世襲騰越土官董均				
二十三世	勅封世襲楚雄府土府董問明				
二十四世	勅封伏魔術正神通五密大我国師董賢	○	始祖(伽羅尤)と同等の神通力を持つ永楽帝に謁見する(1412年)湯天に移住	鶴慶府世襲土官知事董信	明軍に協力して軍功をあげる(1382年)

おわりに

鳳儀董氏は、密教と深い関わりを持ち、代々王朝から国師に封ぜられたという系譜と祖先伝承を持つ氏族である。そしてその宗教性から、王朝の始祖たちと同じような異常出生譚を始祖伝承として例外的に持つにいたった。白族密教の僧アジャリ(阿吒力)としての社会的地位は、邪宗として清朝に禁止されて以降、没落してしまったが、宗教性を失っても神話的始祖伝承が残ったのは、伝承を記した聖旨碑があったからかもしれない。

祖先伝承は、実際よりも話が大きく膨らみやすい。民間伝承の多くは傍証がないため検証できないが、幸か不幸か、その針小棒大ぶりが判明してしまった事例を最後に一つ挙げたい。

「董氏本音図略叙」は、二十四世董賢が永楽帝に招かれ京に行ったときのことを、「賢は蒼山の黒龍に騎し、三日にして京に到る」と、董賢の神通力の凄さを強調する。董賢が京へ行き、永楽帝から褒章を受けたのは、どうやら事実のようで、永楽十九年(1421年)に董賢が撰した「趙州南山大法蔵寺碑」に、そのことが書かれている。では董賢自身による「法蔵寺碑」ではどう書かれているかというと、龍に乗り三日で着いたなどということはもちろんなく、普通に馬に乗り、約二カ月かけて到着したようである²⁰⁾。超常的な神通力を持つとされる董賢の伝承は、董賢自身が喧伝したのではなく、これも後世の人々によって創られたものかどうかだろう。それにしても、すぐとなり本人によって書かれた碑があるにも関わらず、それを気にすることなく、矛盾する内容の碑を立てたということが、なんとも不思議で面白い。

(付記)

本稿は、科学研究費補助金基盤研究(C)「東アジアの一地域としての古代日本における、殯空間での言語表現についての研究」(研究課題番号:18K00288)による研究成果の一部である。

文末脚注

1) 方国瑜は、当該文を含む『通典』巻187「松外諸蛮」以下三百字余りを、貞観二十二年(648年)に梁建方が西洱

- 河に出兵したときに書いた記録であるとして、『西洱河風土記』と名づけ、同著『雲南史料目録概説』第1冊(中華書局,1984年)、及び同主編『雲南史料叢刊』第2巻(雲南大学出版社,1998年)に収録している。なお「西洱河」とは一般に洱海西岸の上関から下関までの間を指すが、ここでは洱海東岸も含めた洱海地区全体を指して使われている(蘇松林「白族先民東洱河蛮大姓及其子孫」張旭主編『南詔・大理史論文集』(雲南民族出版社,1993年)所収)。
- 2) 張錫祿「白族家譜及其研究價值」(同著『南詔与白族文化』(華夏出版社,1992年)所収。初出は『思想戦線』1990年第4期)。
 - 3) 張錫祿「從白族家譜看南詔大理国洱海地区的白蛮大姓」(注2前掲書所収)。
 - 4) 鳳儀の董氏族譜碑については、張錫祿が、注3前掲論文や「古代白族大姓仏教之阿吒力」(注2前掲書所収)、『大理白族仏教密宗』(雲南民族出版社,1999年)などで言及している。そのほか、董氏四十二世の子孫にあたる董国勝による「大理北湯天白族大姓董氏族譜研究」(張旭主編注1前掲書所収)、「大理風儀北湯天董氏族譜整理及研究」(『大理文化』2006年5期,董沛涓と共著)などの一連の研究もある。
 - 5) 鳳儀董氏の聖旨碑及び族譜碑は、段金録・張錫祿主編『大理歷代名碑』(雲南民族出版社,2000年)と張樹芳等主編『大理叢書・金石篇』(雲南民族出版社,2010年)に、拓本・碑文が収録されている。また、『白族社会歴史調査』第4輯(雲南人民出版社,1991年,修訂本は民族出版社,2009年)にも碑文のみだが収録されている。なお、『中国少数民族古籍総目提要・白族卷』(中国大百科全書出版社,2004年)には、張錫祿による当該碑の概要が載っている。
 - 6) 董国勝「大理北湯天白族大姓董氏族譜研究」(張旭主編注1前掲書所収)。
 - 7) 「董氏本音図略叙」の董伽羅尤出生譚部分の原文は次の通りである。
始祖仙胎伽羅尤,系出大唐,生於洱河東岸上茅草中,仙鸞覆育。漁翁至其下,仙鸞騰起,有哭聲徹雲霄。漁者攀岩而上,見一孩提,携取撫養。韶訖之年,雋異超倫。復至生處,得經書法寶,一目無疑,通秘密關,精單伽妙,經濟才雄,神術無方。年至十五,蒙氏聞其神,召漁翁引見。奏其原曰,草里生一天童,誠神人矣。童上添草乃董字,故以董爲姓。拜爲國師。原文については、『白族社会歴史調査(修訂本)』と『大理叢書・金石篇』を参照した(両本の書誌情報は注5参照)。ただ、両本には若干の文字の異同が見られる(『白族社会歴史調査』の整理者は張錫祿、『大理叢書』の整理者は陳碧霞)。そこで本稿では、疑義のある字については、拓本に照らし合わせ、より適切と思われる字を適宜採択した。
 - 8) 「董氏宗譜記」の董伽羅尤出生譚部分の原文は次の通りである。
始祖董伽羅尤,出自大唐,生於洱海東巖上茅草中,仙鸞覆育。雲南王蒙氏狩其處,仙鸞騰起,有哭聲徹雲霄。王親尋之,見小孩,命祿回宮中撫養。韶訖之年,雋異超倫。王曰,天生神童,用相我國,爰以董爲姓,字伽羅尤。蓋因生以賜也。復至生處,得經書法寶,一目了然。年十五,精通秘密,神術無方。蒙王封爲國師,以女妻之,招爲駙馬。
董氏宗譜記碑は、鳳儀の董氏族譜碑と同じく、『大理歷代名碑』及び『大理叢書・金石篇』(両本の書誌情報は注5参照)に、拓本・碑文が収録されている。
 - 9) ルービー・S・ワトソン「死者を記憶にとどめること—東南中国の墓と政治」(ジェームズ・L・ワトソン,エヴリン・S・ロウスキ編,西脇常記等訳『中国の死の儀礼』(平凡社,1994年)所収)。
 - 10) 『大理古佚書鈔』(雲南人民出版社,2002年)所収の明・李浩『三迤隨筆』「無爲寺南詔諸高僧」には、無爲寺の

二代目として董伽羅尤伝がある。その内容は、二羽の仙鸞に育てられていた嬰兒を、漁師夫婦が拾って養ったこと、仙鸞が銜えてきた帛書に「童子頂生草」と書かれていたことから、「董」を姓としたこと、またその帛書から大法を会得したこと、閻羅鳳に仕え、李宓軍を法術で破ったので、国師に封じられ、また閻羅鳳の妃（白妃）の妹を妻としたこと等等、「董氏本音図略叙」や「董氏宗譜記」と類似するものが多い。しかし『大理古佚書鈔』は偽書の疑いがあるため（侯冲『『大理古佚書鈔』是偽書弁』（同著『雲南与巴蜀仏教研究論稿』（宗教文化出版社、2006年）所収）、ひとまず本稿では扱わないこととする。

- 11) 「大理史城董氏族譜」については、張錫禄「〈大理史城董氏族譜〉調査簡介」（『白族社会歴史調査』第4輯（書誌情報注5参照）所収）による解説があり、また『大理叢書・族譜篇』（雲南民族出版社、2009年）にその内容が収録されている。
- 12) 『新唐書』南蛮伝「酋龍（＝世隆）遣清平官董成等十九人詣成都、……有詔召成等至京師、見別殿、賜物良厚、慰遣還國。」
- 13) 例えば、元鄧川同知董公墓表「公諱寶，字性善，姓董氏，世處大理之喜郡。昔觀音建國以蒙氏爲詔，迄世隆，遣布燮董成，入朝於唐，受□國禮而還。成即其始祖成，妣土董公墓銘「公諱光，字志遠，姓董氏，九隆族之裔，世居大理之喜臉。昔蒙段繼守斯土，舉董成任清平之職，即其始祖也」（いずれも『白族社会歴史調査』第4輯（書誌情報注5参照）所収）など。董宝は元代から洪武年間の人、董光は董宝の兄董慶の曾孫で、その生没年は洪武戊午（1378年）—正統辛酉（1441年）、銘は景泰元年（1450年）に董氏の姻族の楊森によって書かれたもので、董宝墓表も楊森の手による。収録されている董氏の明代墓誌は、「大理史城董氏族譜」に連なる人物が多く、喜洲董氏は明代には董成を始祖とみなしていたことがわかる。ただし、「大理史城董氏族譜」の十二世明一十三世明一十四世惠一十五世光の並びは妣土董公墓銘と同じだが、妣土董公墓銘で十二世慶の父生は、「大理史城董氏族譜」では九世と間が空いている。墓誌からは董成から董生までの各世代の詳細はわからず、また「大理史城董氏族譜」も始祖董成から九世董生ままでの間は不明となっている。
- 14) 伊藤清司「系譜神話の諸相—ナシ族の創世神話と木氏歴代宗譜」（同著『日本神話と中国神話』（学生社、1979年）所収）。他にも、遠藤耕太郎「木氏歴代宗譜」と納西族・摩梭人の民間系譜」（『アジア民族文化研究』第18号、2019年）で、モソ人の事例が報告されている。
- 15) 拙稿「中国少数民族と古典籍」（百田弥栄子・工藤隆・真下厚主編『古事記の起源を探る 創世神話』（三弥井書店、2013年）所収）、同「古代中国の系譜意識」（『アジア民族文化研究』第18号、2019年）参照。
- 16) 『旧唐書』南蛮伝「南詔蠻，本烏蠻之別種也，姓蒙氏。蠻謂王爲詔，自言哀牢之後。」
- 17) 明景泰元年（1450年）撰の石碑「三靈廟記」や、明成化十七年（1481年）立碑の「妣土楊公同室李氏寿蔵」には、李の実から一女子が生まれ、彼女が川で龍が化した木に触れ感生して段思平が生まれたことが書かれている。
- 18) 唐時、漁人が洱河岸で鵬遺卵、収之、有頃、破卵而出爲嬰兒，漁人異之，不敢加害。嬰兒能食，即解種種技量。長而爲僧，居崇嶺莊，人呼爲崇嶺師。既長，能呼風致雨，驅役鬼神，指使如意。又能以符咒化石爲酒食，千百人皆醉飽。南詔憚之，師輒化爲鵬，飛集高真寺，不知所終。張錫禄『大理白族仏教密宗』（雲南民族出版社、1999年）によると、明・李元陽撰『雲南通志』にも、これとほぼ同内容の記述がある。
- 19) 趙櫓『論白族神話与密教』（中国民間文芸出版社、1983年）。
- 20) 当該箇所原文は次の通りである。原文は『白族社会

歴史調査（修訂本）』（民族出版社、2009年）による。

永樂十年六月，欽差太監李謙馳驛取賢竝男童壽等。七月二十三日騎站馬十四啓程，到九月二十日午時武英門引見，便賞紅服禪衣十數件・大宴等。

【資料1】鳳儀董氏「董氏本音図略叙」要約

始祖の仙胎伽羅尤は、唐代の人で、洱海の東岩の草むらの中で生まれ、仙鸞が覆い育てた。ある漁師が岩の下を通りがかったとき、仙鸞が飛び上がって雲まで届くような鳴き声を上げた。漁師が岩をよじ登ってみると一人の子どもがいたので、連れ帰って養った。歯が生え変わるころには、人並外れた才能を発揮した。彼は生まれたところに戻って経書を手に入れ、その神術は並ぶ者がいなかった。十五歳のとき、蒙氏がその評判を聞き、漁師を召し出して、由来を聞いた。草むらに生まれた天の童子だということで、「董」字の上に草かんむりを加えて「董」字とし、これを姓とした。蒙主は彼を国師とし、羅尤は蒙氏を補佐した。

羅尤が三十五歳のとき、子の三廓に「お前の背中には星がある、お前はきっと王になるだろう」と言った。その後、蒙氏が孝桓（異牟尋）のとき、唐の將軍李宓が南に軍を進め、洱海のそばまで迫った（754年）。王が羅尤に、「大軍が侵入してきたが、どうすればよいだろうか」と言ったので、羅尤は八卦台に登り、真言をととなえて、唐軍を全て溺れさせた。今の万人堆はそのときのものである。蒙氏は、「国師の神功には報いようがないので、位を譲ることで償いしたい」と言い、三廓を即位させた。三廓は子の廓眉を王子職に封じた。羅尤は晩年無為寺に住み、八十二歳で亡くなった。蒙主は彼を海東の龜山に葬った。蒙氏の末年、鄭（大長和国）・趙（大天興国）・楊（大義寧国）の三代に位が譲られたとき、董氏は蒙京に移住した。

宋の太宗光義の二年（977年）、段思平は生まれつき不思議なところがあり、人々が王と呼んでいた。楊干貞はそれを聞き、兵を差し向けた。思平が逃げて閩邑にやってきたとき、（董氏九世の祖）普明と出会った。大理に戻った思平は、普明を国師とした。あれとき大きな桃を得たので、思平が普明と食べようとしてを割いたところ、中から「昔昔」の二字が出てきた。普明は、「我が主が即位される日が決まりました、十二月二十一日です」と言い、はたしてその言葉通りになった。普明はまた（上関と下関の）上下二関を建設した。神兵を使って橋を架けたので、またたく間に完成した。普明が亡くなると、思平は自ら蘭若峰のまに葬った。

その子の祥明は、明啓帝（段素廉、位1010年—1022年）と（大理の）五華楼で会い、天王壇を開き、兵を挙げて大いに勝利した。

祥明には二人の子があり、次男の祥福は二十四歳のときに、天佑帝に会った。保安元年（1045年）四月八日に、麻和壇主となり、洱海の水で舍利を洗った。太上皇五年（1079年？）のときに日照りが続いたので、上元寺で開壇したところ、大雨が降った。そこで一族の各戸に米六十石を与え、千戸職とした。祥福は八十三歳で亡くなり、王が自ら葬った。

その子の義明は、十九歳のときに、上治詔門師となった。正治元年乙亥五月、圓明寺の黒龍が御門に現れたので、義明はそれを捕らえて白塔江へ送った。義明は四十歳のとき、宣仁帝（段正嚴、位1109年—1147年）に会った。（宣仁帝の）五年（1113年）は、宋の寧宗十年（1203年）にあたる。そのとき、天に太陽が二つ出て、七日たっても元に戻らなかった。宣仁帝が義明に命じて祓わせると、輝きがおさまったので、神通妙化衛國真人の称号を与えた。

義明の子の明連は三十七歳のときに、聖徳皇帝に会い、恩聯門師となった。

明連の長男の連義は、功極帝祚大神通の称号を賜り、次男の連福は、享天帝（段智廉、位1200年—1205年）の鳳曆（1200年—？）のときに官職を賜った。三年後の辛酉の年（1201年）に、仏頂寺を建てた。

その孫の温明は、太上皇段智詳に会い、河尾鎮開拋漠王に封ぜられた。

その子の明寿は二十五歳のとき、爵禄を賜り、毎年米七十石を与えられた。天開帝（段智祥，位 1205 年—1238 年）が明寿に崇聖寺で雨乞いをさせたところ、大雨が十八日間降り続いて止まなかった。止めるよう請うとすぐに晴れた。

天定三年癸丑の年（1253 年）、（董氏二十三世の祖）量は無為寺に入り、法名は智行といった。元の世祖（フビライ）が金江を渡り北から進軍してきたとき、漏邑あたりが真っ暗になり、進めなくなった。すると暗闇から突然一人の老人が現れ、「この先には仏国があります、王が刀を収めれば、進むことができるようになるでしょう」と言った。この老人が量である。世祖は拜して、国師に封じた。世祖は天下を得ると、量を入朝させ官職を授けようとしたが、量は辞した。そこで子孫に士官の職を与えることにした。

明の洪武十五年壬戌の年（1382 年）、明軍が南方にやってきて、ことごとく平定した。（董氏二十四世の祖）賢は、たいそう不思議な力を持ち、密教を修め、その神通力は始祖と同じだった。永樂十年壬辰（1412 年）九月二十日、欽差太監李謙が皇帝の命で賢を招いた。賢は蒼山の黒龍に乗り、三日で京に着いた。二十五日に武英門で朝見し、二十九日に奉天殿で宴を催した。二カ月余り滞在するうちに、皇帝は彼を深く尊敬するようになった。皇帝は彼を大我土国師とし、爵禄を賜ろうとしたが、賢は受けずに国に戻った。賢には十一人の子がいたが、賢より先に亡くなった者が六人、残りの五人が、湯天五支族それぞれの祖である。（後略）

【資料 2】鶴慶董氏「董氏宗譜記」要約

始祖の董伽羅尤は、唐代の人で、洱海の東岸の芝草の中で生まれ、仙鸞が覆い育てた。雲南王の蒙氏がそこで狩りをしているとき、仙鸞が飛び上がって雲まで届くような鳴き声を上げた。王自らそこへ行くと、子どもがいたので、宮中に連れ帰り育てた。齒が生え変わるころには、人並外れた才能を発揮した。王は、「天が神童を遣わしたのは、我が国を助けるために違いない」と言った。そこで董を姓とし、字を伽羅尤としたのは、生まれに由来している。その後生まれた場所に行き、経書や法宝を得ると、一目で理解した。十五歳になると、その神術は並ぶ者がなかった。蒙王は彼を封じて国師とし、娘を嫁がせて、駙馬とした。唐元宗（玄宗）の天宝十三年甲午（754 年）、蒙主神武王（閣羅鳳，位 748 年—779 年）のときに、唐は都督の李宓に命じて南に軍を進め、洱海のそばまで迫った。神武が尤に、「大軍が迫っているが、どうすればよいだろうか」と言うと、尤は八卦台に登り、神法を使い、唐軍を全て溺れさせた。今の万人塚はそのときのものである。尤は晩年無為寺に住み、八十二歳で亡くなった。蒙主は彼を海東の龜山に葬り、陰陽變理仙術神功天童国師仙胎董伽羅尤に封じた。

亜国夫人蒙氏は、董三廓を生んだ。尤が三十五歳のとき、「お前の背中には星がある、いずれきっと王になるだろう」と言った。神武王の孫孝桓王（異牟尋，位 779 年—808 年）は即位すると、「かつて唐軍を破ったのは、国師父子の神功である、その功は生涯かけても報いがたいので、位を譲ることで償いしたい」と言った。孟冬二十七日に、三廓を三日間即位させ、開慧光王に封じた。

廓の子の董廓眉は、王子職に封ぜられた。眉の子の董眉聚は、無量神功国師に封ぜられた。聚には五人の子があり、長男の董丈疋は世襲滇池指揮に封ぜられた。

疋の子の董成は、蒙氏十一代目の景莊皇帝（世隆，位 859 年—877 年）の清平官となった。唐懿宗の咸通元年庚辰（860 年）、成が唐に遣わされることになった。そのころ李福が成都節度使となっていたが、成が対等の礼をしたため、成を捕らえた。皇帝はこのことを聞くと、成を釈放させ、京師まで送らせた。帰国の際には、珍貴なものを多く賜った。

（成の）子の随は、（密教の）秘術を習い、国師に封ぜられた。

子の普明は、伽羅と号した。そのころ段思平が、生まれつ

き不思議なところがあるため、人々に王と呼ばれていた。後晋の高祖天福元年丙申（936 年）、南詔では肅恭皇帝楊干貞が位にあったが、そのことを聞くと、兵を差し向けた。思平が逃げて閩邑に来たとき、普明と出会った。桃を食べようとしたところ、中にいた虫の噛み跡が「青昔」の二字になっていた。普明は、「青字は十二月、昔字は二十一日のことです、きっとその日に王となるでしょう」と言った。はたしてその日に王となった。思平が即位したときは、後晋の高祖天福二年丁酉（937 年）だった。三年に、平は普明を国師とした。明はまた上下二関を建てたが、神兵に橋を架けさせたので、またたく間に完成した。晩年は感通寺に隠居し、弥勒仏堂を造り、九十八歳で仙化した。明政皇帝段素順（位 969 年—986 年）は、自ら彼を蘭若峰の下に葬り、功德嵩岳濟世護国国師に封じた。

（普明の）子の明祥は、波能山で修行し、十五歳で光聚咒を十万五千回となえ、国師に封ぜられた。宋太宗の雍熙二年乙酉（985 年）、南詔の昭明皇帝段素英（位 987 年—1009 年）のとき、出兵しようとして、五華楼に天王道場を立て、明祥を護軍壇主としたところ、大いに勝った。八十二歳で仙化し、梵業崇広大国師に封ぜられた。

（明祥の）子の祥義が二十四歳のとき、宋仁宗の慶曆元年辛巳（1041 年）、南詔の天明皇帝段素興が即位した年の孟冬、雷鳴が止まないのので、祥義がこれを祓わせたところ、壇を置いて灌頂すること三日で、雷鳴が止んだ。そこで金銀寶貝などを賜った。七十七歳のとき、それは宋哲宗の紹聖元年甲戌（1094 年）、南詔の聖徳表正皇帝高昇泰ときに当たるが、日照りが続いたので、祥義を大壇主としたところ、二日目で雨が三昼夜降り続いた。帝は大いに喜び、二月の仏会に値するとして、宴を賜った。八十三歳で仙化した。（帝は）自ら葬儀を行い、道濟無方崇広国師に封じた。

（祥義の）子の義明は、十九歳のとき、高昇泰が守護僧とした。ある夜半に、圓明寺の黒龍が大蛇に化けて、皇帝の枕元に現れた。帝は驚いて義明に祓わせたところ、指で弾いて大蛇を白塔江に追いやつた。宋徽宗の政和六年（1116 年）、南詔の宣仁皇帝段和誉（段正嚴）九年、そのとき義明はすでに四十歳になっていたが、その年の六月、太陽が二つ現れ、七日間照り続けた。義明に祓わせたところ、たちまち一つとなったので、金銀寶貝などを賜った。七十九歳で仙化した。（帝は）自ら葬儀を行い、神通妙化衛国真人に封じた。

（義明の）子の明連は、十五歳で山に入って修行し、光聚咒を十万七千回となえた。南宋高宗の紹興十七年（1147 年）、南詔の正康皇帝段正興が即位し、明連を国師として、天長寺を与えた。九十六歳で仙化し、育国国師に封ぜられた。

（明連には）二人の子があり、長男を連義、次男を連福といった。南宋孝宗の乾道八年（1172 年）、南詔の極功皇帝段智興が即位すると、連義は選ばれて国師となった。董連福は前職を継いだ。福の子の福温は、東宮侍御に封ぜられた。

その子の温明は、十五歳で摩耶山に入った。南宋寧宗の慶元六年庚申（1200 年）、南詔の享天皇帝段智廉が即位すると、温明は選ばれて大国師となった。七十歳で座化した。

その子の董明寿は、二十五歳のとき、南宋寧宗の開禧元年（1205 年）、南詔の神宗皇帝段智祥が即位し、国師となった。丙寅の年（1206 年）に、赤雪が降り、それが七日間続いたので、明寿に龍神咒を行わせたところ、雪はただちに止んだ。甲戌（1214 年）に、雨が十八日間降り続いたので、寿に祈らせたところ、晴れた。九十九歳で仙化し、灌頂国師に封ぜられた。

（明寿には）二人の子があり、長男の董春智は前職を継いだ。次男の董寿正もまた前職を継いだ。

寿正の子の董正福は、相国国師に封ぜられた。

（正福には）二人の子があり、長男を董忠義といった。南宋理宗の宝祐元年癸丑（1253 年）、南詔の摩訶羅嵯王段智興（段興智）の天定三年、蒙古憲宗（モンケ）の三年のときに、日照りとなったので、忠義を咒師として雨乞いさせたところ、苗

が生長した。六十三歳で真寂した。正福の次男董孝義は清平官に封ぜられた。

忠義の子の董連長は、清平官に封ぜられた。

連長には四人の子があり、長男の法舟は出家した。元世祖(フビライ)の至元三年(1266年)、南宋度宗の咸淳二年丙寅に、法舟は妙香城西山に草庵を作り、無為寺を修理した。連長の三男董空源、四男董妙談の二人は、左右に方丈を建てた。南宋帝昀の祥興二年(1279年)春二月、元軍が大理の無為寺に攻めてきたとき、法舟は座禅を組み、頭上から五色の光を放っていた。そこで法舟を京師に連れていき、王に拝謁させた。王はこの僧に徳行があるのを見て、大理土官知府を賜ったが、法舟は受けず、瀘州に戻り、七十三歳で仙化した。

二十二世祖と二十三世祖については、宗譜が失われ、抄本にも二篇が欠落しているため、名前や事蹟がわからない。

二十四世祖の董信は、大元順帝(位 1333年—1368年)の

ときに生まれた。大明洪武十五年壬戌(1382年)に明軍が大理に入った。その年の七月、普顔篤、高森らが叛いた。信は人民を集め、官軍に協力して、昼夜攻撃した。十六年癸亥(1383年)、董信はその功績によって、鶴慶府世襲土官知事となった。信には三人の子があり、永樂五年(1407年)に病没した。董信は大理から鶴城東門外の太平村へ移住した。そのため信を一世祖とする碑誌がある。唐代の董伽羅尤からかぞえると、信は二十四世祖である。

(中略)

董氏は唐代から(述者の)成まで、およそ四十世。董信公の前二代が漏れているのは、原譜が失われ、わからなくなってしまったからである。戊寅(1878年)の冬に、趙州湯顔村の宗祠石碑、喜州の董正官(が1842年に編纂した)系譜と比べたが、誤りはなかった。